

じて生ずる人なれば、脾胃の氣薄くして漏泄し安き歟、産後脱血脱氣して暴死するもの、此國のみ多く聞ゆ、人氣を受ける事薄く侍る故なるべし、此を以て寒冷の藥多く害ありて、温補の治療相應するにや、されど京師難波及び東都、今人參の大劑時めき侍る、是に依て又害をなす事多し、今日我人温劑になれ、寒冷の藥を用ゆる事を恐る、ゆへあたらしぬ事間々ありと見ゆといへり、
 〔鹽尻 四十二〕小兒暴瀉し頻に死するもの多し、府下の庸醫はハヤテといふにや、諸藥驗なく見へし、然るに醫家必讀曰、

漿水散 治暴瀉如水一身盡冷汗出尤脈弱氣少不能言甚者嘔吐此爲急病 半夏一兩 良姜五分 乾姜炮 內桂各五匁 甘草五匁 附子炮五匁

右細末して、每服 四匁 水二鐘煮一鐘服云々、

〔時還讀我書〕鎮西諸州ニハ、夏月、小兒ノ暴利多ク行ルトキケリ、筑前ハ其證最夥シ、余○多紀彼元堅

藩ノ醫青木春澤ニ乞テ其概略ヲ録セシム、今コヽニ掲出スト云フ、暴利ハ多ク六月頃ヨリ八月頃マデアリ、就中中元後稍涼氣ヲ催ス時節最多シ、

〔橘黃年譜〕上、天保八年七月十四日夜、麻布狸穴旗下士坪田氏ノ兒生テ三歲、暴ニ發熱シ、翌十五日朝ニ至リ吐利甚、脈弦數、身熱燒ガ如ク、時ニ心下ニ撞キ、顔色青慘、眼閉テ開能ハズ、煩渴飲ヲ引、形體頗ル脱ス、余謾ニ認テ厥陰寒熱錯雜ノ證トシ、乾姜黃芩黃連人參湯ヲ與フ、無効而死ス、此證俗間稱シテ早手ト云、蓋迅速ニシテ死スルノ意ト云、後南溟問答ヲ讀ニ、西國ノ地此病尤多シ、名テ暴瀉病ト云、又大神活庵治痢軌範云、余以攻利爲本、大凡無不治、人不知暴熱利、故世醫往々誤治、當爲長大息也、余因悔、早ク大承氣湯ヲ與テ之ヲ下サ、ハコトヲ書シテ以後鑒トス、

尾陽村瀨白石曰、ハヤテノ病他邦ニ無處ニシテ、吾尾ノミニ限レリ、醫亦其名ヲ知ラズ、徒ニ呼デ急症トス、延享ノ頃加藤玄順、平安ヨリ來リ、治痢經驗ヲ著シ、文化年間大鶴活庵治痢軌範ヲ著ス

急症トス、延享ノ頃加藤玄順、平安ヨリ來リ、治痢經驗ヲ著シ、文化年間大鶴活庵治痢軌範ヲ著ス

急症トス、延享ノ頃加藤玄順、平安ヨリ來リ、治痢經驗ヲ著シ、文化年間大鶴活庵治痢軌範ヲ著ス